

# オーケストラ・フィルジツヒ 第20回演奏会



2026年2月23日(月・祝) 13:30開場 14:00開演  
ふくしん夢の音楽堂(福島市音楽堂)大ホール

主催：オーケストラ・フィルジツヒ

後援：福島県、福島市、福島市教育委員会、福島民報社、福島民友新聞社、福島テレビ、福島中央テレビ、福島放送、  
テレビユー福島、ラジオ福島、ふくしまFM、福島コミュニティ放送FMポコ



楽団長  
小川 裕

桃の花のつぼみも膨らみはじめ、春の兆しを感じる季節となりました。音楽堂のエントランスホールでは、私たちオーケストラ・フィルジッヒのシンボルである「もも」の花が、かわいいピンクの花をたくさん咲かせて皆様をお迎えしております。本日は私たちオーケストラ・フィルジッヒの演奏会においていただきまして、誠にありがとうございます。

会場の皆様をはじめ地域の皆様には、当団設立より温かく見守っていただいておりますことに、心より御礼を申し上げます。おかげさまをもちまして、私たちは今回の演奏会で第20回を迎えることができました。この記念すべき節目の演奏会のプログラムにはロシアの作曲家の曲を取り上げました。ロシア音楽のもっている独特の響きを会場の皆様へお届けしたいと思います。特に、「シェヘラザード」の華麗で色彩的な、エキゾチックで幻想味ゆたかな世界観を表現できればと思っております。

常任指揮者の高橋裕之氏とともにオーケストラ・フィルジッヒの仲間たちが総力を結集して、今回も新たな「ももオケサウンド」を追求していきたいと思っております。団員一同、心を一つにして演奏いたします。どうぞ最後までお聴きください。

## 指揮者プロフィール

### 高橋 裕之（常任指揮者）



福島市出身。福島大学大学院音楽教育専修（作曲・指揮）修了。

大学在学中より竹澤嘉明氏の指導の下、声楽研究会学内オペラ公演を指揮してオペラ制作の魅力に触れ、その後オペラ「乙和の椿」（東京文化会館）で副指揮者を務めたことをきっかけに、本格的に指揮の研鑽を積み始める。これまでに阿部雅人、岡本美千代（ホルン）、嶋津武仁、K・レーデル、井上宏一、本多優之（指揮法）の各氏に師事。下野竜也氏によるマスターコースを受講するなど国内、そして欧州においてマスタークラスを受講しディプロマを取得。

現代の邦人作品にも意欲的に取り組み、金光威和雄作曲の新作オペラ「いのち甦る」初演では、作曲家自身に「よく研究された上での確かな指揮」と評された。また、福島市制110周年記念事業オペラ「乙和の椿」の上演では、『音楽の友』誌上にてオペラ評論家の岸純信氏から好評を受ける。2016年、スタラ・ザゴラ

州立歌劇場（ブルガリア）にて「椿姫」を指揮、欧州にてオペラデビューを果たす。管弦楽分野では、ルーマニア・ラジオ・シンフォニーオーケストラ、パザルジク交響楽団を指揮。ドレスデン音楽祭、ラ・フォル・ジュルネ・ジャポニ等に出演するほか、福島・新潟・東京を中心にアマチュアオーケストラに客演するなど、各地で活動をしている。

現在、福島東稜高等学校芸術科教諭、福島県立医科大学非常勤講師。

## Program

M. ムソルグスキー（N. リムスキー＝コルサコフ編曲）

歌劇「ホヴァーンシチナ」より 前奏曲『モスクワ川の夜明け』

A. ボロディン

歌劇「イーゴリ公」より 『韃靼人の踊り』

< 休憩 20分 >

N. リムスキー＝コルサコフ

交響組曲「シェヘラザード」

- I. 海とシンドバッドの船
- II. カランダール王子の物語
- III. 若い王子と若い王女
- IV. バグダッドの祭り、海、青銅の騎士の立つ岩での難破、終曲

# 曲目解説

cultureは「文化」と翻訳されるが、原義は「耕された(cult)もの(ure)」。つまりcultureとは、耕されることで「その土地」ならではの香りがする土着的なものと言える。桃の香りを冠する当団の演奏会もついに20回を数え、福島の音楽文化を耕し続ける存在感を帯びてきたとすれば望外の喜びであるけれども、その記念すべきプログラムが、ロシア音楽という実に独特な香りを宿す楽曲で彩られることもまた、決して偶然ではないように思う。濃厚なロシアプログラムを、どうぞ堪能いただきたい。

## 《ロシア音楽を体現した「ロシア五人組」》

時は19世紀。ナポレオンのロシア遠征を失敗に追い込んだロシアが台頭すると同時に、ロシア音楽も一気に花開いた。「近代ロシア音楽の父」グリンカが切り拓いたロシア音楽の原野に発芽したのが、「ロシア五人組」。バラキレフ、キュイ、ボロディン、ムソルグスキー、リムスキー=コルサコフを代表とするこの一団は、ロシアの民衆が紡いできた民謡や舞曲を積極的に評価し、豊かなアジアへの憧れからくるエキゾティズムや音楽で風景や物語を再現する「標題音楽」を奏でた。それゆえ、作品は親しみやすい旋律で溢れる。

## M. ムソルグスキー（N. リムスキー=コルサコフ編曲）： 歌劇「ホヴァーンシチナ」より前奏曲 『モスクワ川の夜明け』

### 《ロシアの源流としてのモスクワ川》

ロシア史では「タタールのくびき(軛)」と呼ばれるモンゴル人の支配を脱したのが、モスクワ大公イヴァン3世。ビザンツ帝国(東ローマ帝国)皇帝の姪を后とした彼は、モスクワを「第3のローマ」と権威づけ、ギリシア正教の聖地とした。モスクワMoskvaとは、モスクmosk(沼沢地)とフィン語のva(水)で「沼沢地の川」を意味する。モスクワ川は、文字通り現代ロシアの源流そのものである。

### 《作曲家ムソルグスキー》

ムソルグスキーは、地主の子として恵まれた環境で育つ中で、農民たちとの交流を通じて民謡や舞曲に親しんだ。サンクト・ペテルブルクの士官学校を卒業後、軍に入隊した17歳の彼が出会ったのが、軍の研修医だった23歳のボロディン。その後、バラキエフの手ほどきで作曲活動を本格化させたが、クリミア戦争の敗戦で自国の後進性を痛感した皇帝アレクサンドル2世による「農奴解放令」の発布で、地主だった実家の環境が激変。収入を得るための生業を転々とする中、母親の死に伴う心労からアルコール依存症になり、42歳で逝去。『展覧会の絵』(ラヴェル編曲)や『はげ山の一夜』(リムスキー=コルサコフ編曲)など、彼の音楽は死後に評価されることとなった。

### 《聴きどころ》

ロシアの近代化に翻弄される中、歌劇「ホヴァーンシチナ」は未完の遺作となった。これを補筆・完成させたのが、盟友リムスキー=コルサコフ。ロシア史で大帝と称されるピョートル1世をめぐる権力闘争の史実をもとにした歌劇であるが、前奏曲はそうした陰惨な内容とは真反対の清澄さを響かせる。木管楽器が奏でる優雅な旋律は極めて抒情的で、目を閉じればモスクワ川が浮かんでくるようである。

## A. ボロディン：歌劇「イーゴリ公」より『韃靼人の踊り』

### 《本業は化学者の「日曜作曲家」ボロディン》

ボロディンは、ジョージア貴族の名家に生まれ実子としては認知されなかったものの、よい教育を受け、サンクト・ペテルブルクの医科大学に進学。結局、医者ではなく化学者としての道を歩むこととなり、彼の名を冠する「ボロディン反応」を発見。また彼が発見したとされる「アルドール反応」は、2021年のノーベル化学賞のもとになった理論だとか。"ド文系"の筆者にはまったく理解できないが、化学者としての業績と作曲家として残した楽曲の素晴らしさからは、大谷翔平並みの二刀流の凄みを感じる。

### 《聴きどころ》

「韃靼(だつたん)とは「タタール」の漢訳で、中国ではトルコ系騎馬遊牧民の呼称として使われたが、ヨーロッパではモンゴル人の呼称となった。モンゴルの圧倒的な軍勢に恐れをなし、ギリシア神話の「奈落の神」タルタルスに準えたのである。そして、彼らが長距離移動の際に馬肉を鞍の下で柔らかくして食べていた料理は「タルタルステーキ」と呼ばれた。なお、「イーゴリ公」の物語は、12世紀の中央アジア平原に勢力を広げたトルコ系遊牧民の「ボロヴェツ人」に対する遠征劇であり、モンゴルとは関係ない。

ロシア国民楽派の真骨頂とも言える、民族の英雄を主人公にした叙事詩的な歌劇で、ボロディンの後半生の重要な作曲であったが、化学者としての本業の忙しさゆえに完成できず、最終的にはリムスキー=コルサコフやグラズノフが補筆・完成させている。どこまでも地平線がのびゆく中央アジア平原の雄大さと、イーゴリ公の勇ましい合戦の様子が、どの楽器にも見せ場を持たせながら見事に奏でられる。

## N. リムスキー=コルサコフ：交響組曲「シェヘラザード」

### 《時代の写し鏡としての音楽》

盟友のムソルグスキーやボロディンの遺作を補筆・完成させながら後進の指導にもあたり、「リムスキー=コルサコフ音階」という独自の理論をも開発しながら、自ら各地へ出向いて農民や漁師から聴いた民謡を譜面に書き取る。軍人と音楽家の両輪を回しながらの活動であったことを思うと、まさに八面六臂の活躍。色彩感豊かな音楽が特徴の彼の作品の筆頭格が、この「シェヘラザード」であることは言うまでもない。この壮大な冒険音楽によって掻き立てられたオリエンタリズムは、当時ユーラシア大陸全土で展開された帝政ロシアの南下政策と重なる。映像というメディアがない時代において、人々の想像力を刺激したのは間違いなくこうした音楽であっただろうということが、本当によくわかる作品である。

### 《聴きどころ》

花嫁をつぎつぎと殺してしまう暴君シャーリアール王のもとへ嫁ぐことになったシェヘラザード姫が、王を改心させて命を長らえようと毎夜ごとにおもしろい話を聞かせるという『アラビアンナイト(千夜一夜物語)』。イスラーム文化を代表する物語を題材に、眩いばかりの見事なオーケストレーションで表現される。

I. 海とシンドバッドの船：冒頭に金管楽器で奏でられる力強いテーマは暴君を、バイオリンソロで奏でられるテーマはシェヘラザードを表現する。この2つのテーマは、曲全体を通して様々な変奏で何度も登場する。組曲の序曲的な位置づけのこの曲は、まさにこれから大海原に出帆する船そのものである。

II. カランダール王子の物語：カランダールとは、諸国を行脚する遍歴僧。ファゴットでユーモラスに演奏される主題部には、とぼけた味わいと哀愁がある。突然鳴り響く金管楽器の粗暴な旋律は、シェヘラザードの語りを中断する王の怒りにも聞こえる。

III. 若い王子と若い王女：最もエキゾチックな旋律で始まり、王子と王女の踊りを想像させる舞曲も聞こえる。途中のバイオリンソロには、物語そのものと現実の語りの往復を感じつつ、曲は最後まで美しい。

IV. バグダッドの祭り、海、青銅の騎士の立つ岩での難破、終曲：第1~3曲に登場した様々なテーマが随所に響く。青銅の騎士像の立っている大岩に船が近づくと、次々に吸い寄せられて難破するという物語の通り、音楽も破局を迎えるが、それはシェヘラザードの語りによる王の改心とも思われる。

今回取り上げる3人の作曲家たちは、いずれも独学で音楽を学んだアマチュアの経歴をもつ。アマチュアという言葉は、ラテン語の「amator」(アマートル)が語源とされ、その意味は「愛する者」。ロシア民謡(=民衆)への愛を土台にした3人の楽曲は、まさに私たちアマチュア音楽家の精神を表現している。

(渡邊優輔)

# The 20th concert of ORCHESTER PFIRSICH

常任指揮者：高橋 裕之

ミュージックパートナー：佐藤 一成

トレーナー：小林 直央

コンサートミストレス	鈴木 崇大	コントラバス	クラリネット	トロンボーン
藤田 若菜	樋口 康子	久能 潤一	佐藤まなみ	大槻 祐介
	三浦 仁美	佐藤 恭花	山口さやか	菊池 誠一
第1ヴァイオリン		田中 成和	渡部 ゆり	齋藤 美久
石川 仁保	ヴィオラ	時末 耀		
小島 健弘	大橋扶美子	根本 未央	ファゴット	チューバ
渋谷 桂子	紺野 純	渡邊 若菜	角田 恵	佐々木歩望
高橋 靖行	佐藤 睦浩		戸田 一隆	
手塚 幸子	松本 茜	フルート		パーカッション
中島 純子	目黒 夏美	金田有希子	ホルン	大内 綾子
渡部あすか	吉田知佳子	斎藤 美紅	小川 裕	近藤 智規
渡部 純子		滝田 宏美	佐藤 敦子	齋藤 れな
和田 拓樹	チェロ		佐藤 桃子	富山 弦
	浅野 智之	オーボエ	本田 純一	松木 文
第2ヴァイオリン	高橋 季	大里 芹菜	渡部 さほり	渡部 瑛都
秋本 愛美	広瀬 ひかる	鴻野 恵子		
伊藤 敦	細井 淑子	堀井 このみ	トランペット	ハーブ
永林 衛	宗像 豊		荒井 美絵	高久 美穂
志賀 謙一	山浦 貴之		小林 飛鳥	
十文字 高志			那須 康輝	

## Orchester Pfirsich オーケストラ・フィルジッヒ

オーケストラ・フィルジッヒは、福島県に縁のある器楽奏者を中心に2003年に創立された非常設のオーケストラです。諸事情により恒常的なオーケストラ活動が困難な人、音楽教室の講師、各地の市民オーケストラに所属している人などにより構成され、音楽を愛する人の新たな交流の場となっています。そして限られた練習回数の中で、より質の高い演奏を行うことを目標に活動しています。

2004年2月、芸術監督に作曲家で福島大学教授の嶋津武仁氏、常任指揮者に福島市出身で新進気鋭の高橋裕之氏を迎え初の演奏会を開催。以来、バロックから現代まで、交響曲からオペラまで、様々な時代・ジャンルの曲に取り組んでいます。2014年2月の第10回演奏会ではベートーヴェンの「第九」を、福島市内の高校生を中心として編成された合唱団コア・フィルジッヒと共演、大きな喝采を博しました。

楽団名となっている“フィルジッヒ (Pfirsich)”＝桃は福島の名産品です。その花が美しく咲き、香りが風に乗って届くように、また、その果実の豊かな味わいが人を喜ばせるように、当楽団の存在が、音楽を愛する全ての人々にとって歓迎されるようにとの願いが込められています。

お問い合わせ：pfirsich@pfirsich.jp  
ウェブサイト：https://pfirsich.jp

